

三浦綾子論(一) — 「絶望」と「再生」の間

*小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A study of Ayako Miura(1) —between “despair” and “rebirth”

序

文学研究者の中で、三浦綾子は必ずしも高い評価を与えられているわけではない。学会の中で彼女の文学が取り上げられることはほとんど稀である。

しかし、その一方で彼女の文学を愛読する人は多い。彼女の作品はかなりの数が海外で翻訳されている。韓国では三浦綾子はよく読まれている作家のひとりであり、代表作『氷点』はしばしばドラマ化されているという。一九九九年(平成十一年)十月十二日に彼女が亡くなったとき、三浦綾子愛読者のホームページには連日彼女の死を悼む人々のコメントが、我が国のみならず海外からも次から次へと投稿され、それはひとつの社会現象とも言えるものであった。

このギャップをどう捉えるべきなのであろう。

このような傾向は何も今に始まったことではない。かつては賀川豊彦の『死線を越えて』がベストセラーとなり、その翻訳が多くの国々でなされたにもかかわらず、我が国の文学史上にはほとんどその名が記されることはなかった。石坂洋次郎や石川達三も一時は一世を風靡しながらも、今ではその存在すら忘れられかけている状態である。ここにはいわゆる大衆小説、通俗小説を純文学より一段下に見る我が国の精神風土を認めざるを得ない。

近年、文学の衰退ということがさかんに叫ばれる。「活字離れ」という言葉も日常的に聞かれるようになった。その要因にはいろいろなことが考えられようが、文学の専門家たちのこのような姿勢が何らかの影響を及ぼしてきたのではないかと疑ってみる必要はあるだろう。多くの愛読者がいるということは、その作品に何らかの魅力があるということだ。そこにまず目を向けてみることは、文学の危機といわれる現代においてその打開の糸口になるかもしれないのである。

る。

三浦綾子の場合、朝日新聞の懸賞小説として『氷点』が入選して以来、次々と作品が発表されていく中で、確実に多くの読者を抱え続けてきた。一九九八年(平成十年)六月に開館した三浦綾子記念文学館は公立の施設ではない。あくまでも彼女の文学を愛する人々の寄附金によって維持される、民立民営のきわめて特異な文学館である。ここには「想い出ノート」というものが閲覧室のテーブルの上に数多く置かれており、来館者たちは思い思いにコメントを書き記す。そこには三浦文学への熱い思いが書かれてあり、中には「以前から一度ここを訪れてみたいと思っていた、ようやく念願がかなった」と感慨を込めて書いている人も少なくない。来館者たちはこのノートの閲覧者であると同時に記入者でもある。これらを通じて、彼らはいわば来館者同士での絆を確認し合う。ここを何度も訪れるファンが少なくないというのもこうした事情による。この文学館そのものが来館者たちにとって三浦綾子を中心軸とした心の拠り所となっているのである。

この文学館を訪れた人なら誰しも覚えがあるが、ここでは三浦光世、綾子夫妻の仲睦まじい写真が展示されており、来館者の多くはそこに理想的な夫婦の一对を見出ししている感がある。この夫婦のそれまでの足跡については、『道ありき』『この土の器をも』といった自伝的作品によってうかがうことが可能であり、この夫婦そのものが一つの物語となっている。三浦綾子はその作品と共にその生きざままでもが読者の受容の対象となった珍しいタイプの文学者と言えるよう。

このことは、我々にとっては非常に示唆深い。なぜなら、現在において文学

そのものに生き方や道徳的なものを求めること自体が野暮なことに思われる風潮が見られるからである。しかし、三浦文学の読者はそれらの作品を通じて生きる意味を考えさせられ、さらには勇気づけられ、励まされるのだ。読者の多くが彼女に感謝の言葉を惜しまない。その点から言えば、三浦綾子は時代の流れから明らかに外れている。しかし、『氷点』で脚光を浴びて以後も彼女が生活の場を北海道の旭川に定め、決してそこを離れようとしなかったことは、東京を中心とする文壇からは明らかに一線を画そうとする彼女なりの明確な意志があったものと見なければならぬ。

三浦文学についてしばしば言われるのは、平易な言葉、明確なストーリー展開、しばしば用いられる偶然的要素などである。また、キリスト教といういわば「主人持ちの文学」であることも彼女の文学の特徴である。いわゆる文学の玄人から彼女の作品が低い評価を受ける理由の多くはこの辺に存する。しかし、そこを改めて吟味してみないことには、なぜ彼女の文学が今もなお多くの読者を獲得しているのか、説明ができないであろう。今改めて三浦綾子にこだわろうとするのは、彼女の文学に現在の危機的状況から脱却するヒントを見出したいと願うからに他ならない。

一 絶望から再生へ―『道ありき』

人は誰しも自らの幸福を願う。

だが、誰もが幸福を得られるわけではない。自分の置かれた境遇を嘆き、他人の幸福を羨むことはよくある。しかし、このとき我々が陥りやすいのは、幸福が自ら「掴み取る」ものであるにもかかわらず、それを「与えられる」とものと勘違いしてしまうことだ。したがって他人の幸福を羨むことはあっても、自分から幸福になるための努力はしようとしなない。受け身のままで本当の意味での幸福は訪れないのではないか。

三浦綾子の文学はこのことを我々に気づかせてくれる。彼女がその人生の大半を肺結核、脊椎カリエス、帯状疱疹、直腸がん、パーキンソン病など、度重なる病氣と共に暮らしていたことはよく知られている。このハンデを彼女は決してマイナスとは受け止めていなかった。しかし、その彼女も最初からそのように考えることができたわけではない。その精神形成のプロセスを我々は『道

ありき』に認めることができる。

『道ありき』は小学校教師を七年務めた筆者が敗戦後の価値観の崩壊の中、それまでの教師としての生き方に自信を失い、自ら教職を辞し精神的彷徨を余儀なくされていくさまが丹念に書かれていた。投げやりになり、二重婚約をしてしまったのもその一例である。

綾子が教職についたのは十七歳のときのことである。熱心でまじめな教師であった。必要とあらば厳格な態度で生徒に対したことも『道ありき』には書かれている。たとえ成績の良い生徒であっても、その子が別の子を仲間外れにする態度をとれば、反省のため床に三日間も正座することを強いるほどの熱心さだった。自ら教師としての使命を自覚し、それを忠実に実行しようとする。それが当時の堀田綾子だったのである。ただ、彼女はこう述べている。「考えてみると、芳子には三日間もそんな罰を加える必要はなかったのだ。利口なだけにすぐに芳子はわたしの気持をわかってくれたはずであった。だが、わたしも若かった。芳子に期待する余り、三日間もその席にすわらせなかったのは、行き過ぎであった」と。

綾子は確かにまじめだった。しかし、その彼女に欠けていたのは自他を見つめられる心の余裕である。自分がいま教師として行っていることの善意を疑うことは彼女の場合ない。自分がまじめに取り組めば生徒はそれに従うはずだし、彼らは自分が望む形で成長してくれる。彼女はそう信じていたのである。これはある意味において恐ろしい。なぜなら、下手をするとそこには自己絶対化の危険が潜んでいるからである。しかも、彼女は当時の軍国主義教育に何の疑いも抱かなかった。『銃口』の中で主人公の北森竜太が最初に赴任した学校で目の当たりにした光景は、とりもなおさず綾子自身が体験した事例に他ならない。午前五時には教職員が登校し（出勤は午前六時半であったが、校長がこの時間から来ていたからである）、奉安殿の周りや校庭の掃除をする。午前六時半から全職員が本を読むための修養の時間。午前七時から職員朝礼があつて、当番の教諭は本を読んだの感話をしなければならない。このあと勅諭を奉読して教育歌を歌う。綾子はこれらのことに何の疑問も抱かず、受け入れていた。すなわち、彼女はまじめさゆえの危険性を免れなかったのである。彼女が徹底した軍国主義教育者となつたのはこのような背景においてであった。後に触れることになるが、同じまじめでありながら、前川正のそれとは決定的な違いが認めら

れる。

ところで、「信じる」と「妄信する」とは違う。なぜなら、前者は必ず「疑う」と対になってくるからである。人間は本来、「信じる」と「疑う」との両極の間で揺れ動く存在である。「疑う」自分を自覚するからこそ、「信じる」ことの大切さが痛感される。

しかし、「疑う」ことを伴わなければ、それはたんなる「妄信」にしかすぎない。したがって、それまで自分が信じて疑わなかったものが否定されることは、その人間の存在そのものが否定されることに等しい。彼女は、自分が積極的意志によって生徒たちを「教えている」と思い込んできた。だが、敗戦をきっかけにそれまでの教育のあり方そのものが否定されることによって、彼女の自信は根底から揺らぐことになる。自分は「教えさせられてきた」にすぎない。そこには自己主体や批判精神というものはなかった。彼女がほどなくして教職を辞めるのは自然な流れであったと言える。

少なくとも、生徒たちは自分を信じ、その教えに従ってきた。彼女は自分が「妄信する」ことの恐ろしさと同時に、生徒たちから「信じられる」ことの恐ろしさを体験してしまったのである。自責の念は容易に自虐の念へと転じてしまった。その後の自暴自棄ともいえるべき生活はこのようにして生まれたのである。

ちなみに、かつての軍国的な姿勢が敗戦後誤りであったことを痛感させられ、その絶望の淵から転向していった人は少なくない。高村光太郎、吉本隆明、澤地久枝、いずれもそうである。問題はその絶望を本人がいかに受け止め、それを克服していくかなのだ。

綾子にとって、切実な問題は何が正しくて、何が正しくないのかという明確な基準が見出せないという事実だった。それまで軍国主義的な言動をしていた人間が敗戦を契機に簡単に民主主義万歳を叫んでしまうという現実を彼女はこの目で見てしまった。本来、明確な行動方針をもたない人間にはそれは容易にできることであったが、彼女にはそのような芸当はできない。それだけ彼女は「まじめ」だったのである。彼女には白黒をはっきりさせたいという性急なまでの希求があった。しかし、実際の世の中はいわば灰色の部分で覆われているものが殆どだ。彼女は焦れば焦るほど自分の求めるものに出会えないもどかしさを感じていたのである。

彼女の前に幼なじみの前川正が現れたのはそのようなときであった。

綾子の生涯において、前川正は極めて重要な存在である。これは彼がクリスチャンであり、後に綾子が信仰を支えとする生き方を選択したという事実のみにとどまらない。彼はまず、彼女の前に違和感を与える他者として現れた。肺浸潤にかかったことを自分の罪の報いとして受け止め、死ぬことも厭わなかった当時の彼女である。その彼女に対して「もつとまじめに生きてください」という彼の言葉は、余計なお節介にしか感じられなかった。事実、彼女はあらゆる場面で前川に反抗している。しかし、前川はあきらめなかった。その粘り強さがやがて彼女を変えていくのである。

「綾ちゃん！ だめだ。あなたはそのままではまた死んでしまう！」

彼は叫ぶようにそう言った。深いため息が彼の口を洩れた。そして何を思ったのか、彼は傍にあった小石を拾いあげると、突然自分の足をゴツンゴツンとつづけざまに打った。

さすがに驚いたわたしは、それをとめようとすると、彼はわたしの手をつかりと握りしめて言った。

「綾ちゃん、ぼくは今まで、綾ちゃんが元気で生きつづけてくれるようにと、どんなに激しく祈って来たかわかりませんよ。綾ちゃんが生きるためなら、自分の命もいらないうつたほどでした。けれども信仰のうすいぼくには、あなたを救う力のないことを思い知らされたのです。だから不甲斐ない自分を罰するために、こうして自分を打ちつけてやるのです」

わたしは言葉もなく、呆然と彼を見つめた。

いつの間にかわたしは泣いていた。久しぶりに流す、人間らしい涙であった。

（だまされたと思って、わたしはこの人の生きる方向について行ってみようか）

わたしはその時、彼のわたしへの愛が、全身を刺しつらぬくを感じた。そしてその愛が、単なる男と女の愛ではないのを感じた。彼が求めているのは、わたしが強く生きることであって、わたしが彼のものとなることではなかった。

彼のこの行為を支えているものは何なのか。肺結核のため北大医学部を休学状態になっていた彼は、自分の余命が三年ともたないことを的確に理解していた。常に彼は自分の死と向き合い、限られた時間をどう過ごすかを自らに問いかけていたのである。

人間はだれもがいつか死ななくてはならない。死という宿命が逃れられないものであるなら、その宿命を真正面から受け止め、限りある時間をいかにして濃密なものとするのか。彼が自ら引き受けた課題はハイデッガーが『存在と時間』の中で現存在たる人間について考察した事柄と見事に一致する。前川は残された時間の中で、綾子を立ち直らせることを自分の仕事にしたのである。

前川には、綾子のまじめさが痛いほど分かっていった。もともと彼女がいい加減な生き方をしていたのであれば、あれほどの自暴自棄に陥るはずがない。傷つくことを恐れるがゆえにまじめな生き方を彼女が放棄するのであれば、将来彼女はきつと後悔するだろう。まじめさが忌避される世の中は彼にとつては耐え難いことであつたはずだ。確認しておきたいのは、彼が死ぬまでの残された時間を楽しんでいる出で満ちたそうという、通常の恋人にありがちなあり方を決して望んでいなかったことである。彼が望んでいたのは、綾子が一人で生きていく強さをもつことであつた。彼はいわば自分の死後を見つめていたのである。

しかし、残された時間には限りがある。前川にも自分のそのような願いがなかなか伝わらないもどかしさがあつたのだろう。それが先ほど引用した場面のように、不甲斐ない自分を罰するために小石で自らの足を打つという形になったのである。しかし、この行為は下手をする和前川の一人よがりを受け取られかねない。これを目の当たりにした相手がそれを冷やかに眺める可能性もある。だが、綾子は前川のこの行為に彼の誠意を感じ取った。それは彼女が前川の真意を感じ取ることができる資質を備えた女性だったからである。彼女は再会当初、前川に対しては違和感、反発しかなかった。それはキリスト教そのものの不信を彼女が抱いていたからである。しかし、彼女の不信は正しいものをこいねがう思いと表裏一体であり、決してまじめなものではない。前川もそれは確実に分かつていた。一方、むしろ綾子にとつても、反発や不信から出発したことは長い目で見た場合、幸いであつたと言ふべきかもしれない。なぜなら、彼女は前川との関係を通じて、決して表面的次元にとどまらない、本質的な次元で

の他者理解という体験を得られたからである。前川を本当の意味で理解するということは、とりもなおさず同時に自分を変えていくことでもあつた。お互いが深く関わり合うとはそういうことである。

ただ、断つておかなくてはならないが、この二人の関係は、お互いがもたれ合うことなく、それぞれが独立した一個の人間として向き合う性質のものであつた。その点でこの二人の関係は閉じられていない。前川は二人が自分たちの世界だけに閉じこもることを望まなかつた。彼は確実に自分の死を意識しており、自分の死後の綾子の生き方にも十分思いを馳せていたのである。彼は遺書の中で両親に対し、「綾ちゃんノコト、ワカッテイタデショウガ、何モ疚シイコトハナイカラ安心シテクダサイ」と書き残している。また、綾子に対する遺書の中でも、今まで受け取つた彼女からの手紙、あるいは綾子のことに触れた日記を彼女の元に返し、その処分は彼女が自由にできるように配慮をしていた。

彼は自分が「綾ちゃんの最後の人であること」を望まなかつた。愛は本来エゴイスティックなものである。しかし、愛のそのような性質と正面から向き合い、それを克服しようとしたのが前川正ではなかつたのか。もし、自分の死後も彼女がいつまでも自分のことを思い続け、再び誰かを愛することを自ら禁じてしまふのであれば、それはあまりにも悲しいことだ。そこで彼女が自ら幸福を掴み取らなければ、結局それまでの彼の努力そのものが気泡に帰することになる。人生に絶望することなく、与えられた生を精一杯生きること。それが余命いくばくもない前川が彼女に送り続けたメッセージだった。彼は生前、綾子にこう述べている。「綾ちゃん、生きるということは、ぼくたち人間の権利ではなくて、義務なのです。義務というのは、読んで字のとおり、ただしいつとめなのです」

「生きる」ことを自分たちの権利として捉える発想は、「どう生きようとおれ(私)の勝手だろ」ということへと繋がりがかねない。究極的には「死ぬ」ことすらも自分の権利として主張しかねないのである。だが、前川の発想では「生きる」ことは「義務」である。すなわち、我々人間はそれぞれ「生きる」という課題を与えられている、というのが前川の考え方であつた。彼はその課題に三十三年という短い生涯を捧げたのである。

いずれにせよ、綾子は前川によつて絶望の淵から再生し、彼の死によつて再び絶望の底へ落とされた。しかし、そこへ彼女の人生を大きく左右する人間が

現れた。それが後に彼女の夫となる三浦光世だったのである。彼女は光世によってもう一度這い上がることができたのであった。その点で、自分が綾子にとって「最後の人」にならないよう周到に配慮した前川の遺志は十分生かされたのである。ただし、三浦光世について語るとき、忘れてならないのは前川正を正面から彼が受け止めようとした事実であった。光世があまりにも死んだ前川に似ており、綾子がどきりとしたことは勿論のこと、周囲の人々もしばしば光世を前川と間違えたエピソードは『道ありき』にも幾つか書かれている。綾子にとって前川を彷彿とさせる光世に出会えたことは喜びでもあったが、その一方で自分が前川の面影を光世に求めているのではないか、という疑いが拭い去れなかった。それは光世に対しても失礼になる、と彼女は考えた。

見舞いを続ける光世は、寝たきり状態の綾子に「なおったら結婚しましょう。あなたがなおらなければ、ぼくも独身で通します」とプロポーズする。この場面が『塩狩峠』で主人公がふじ子にプロポーズする場面に反映されていることは、三浦文学の愛読者には容易に見て取れよう。このとき、綾子は前川を忘れることはできないと告げた。これに対し、光世はこう述べている。

「あなたが正さんのことを忘れないということが大事なのです。あの人のことを忘れてはいけません。あなたはあの人に導かれてクリスチャンになったのです。わたしたちは前川さんによって結ばれたのです。綾子さん、前川さんに喜んでもらえるような二人になりましょうね」

（五二）

この言葉が綾子にどれほどの力を与えたかは計り知れない。事実、彼女は徐々に回復し、ついに十三年に及ぶ闘病生活から脱することができたのである。そして、二人は結婚する。光世三十五歳、綾子三十七歳。決して若くはない結婚であった。しかも光世は自分の言葉を忠実に守った。前川の遺影や遺骨、手帳などが三浦夫妻の家にずっと置かれていることはよく知られている。

光世は現在の綾子に大きな影響を与えたのが前川正であることを十分すぎるほど知っていた。現在の彼女との出会いを喜びをもって迎えられたのだとしたら、それは前川を抜きにしては考えられない。それが光世の考え方であった。そこには前川に対する光世の敬愛の念があったことは改めて断るまでもない。前川は三十三歳という若さで夭折している。綾子との愛をさらに育んでいき

かったであろうに、その思いは半ばで挫折せざるをえなかった。その無念さを受け止めれば受け止めるほど、光世は今度は自分が前川に代わって綾子との愛を育てていくことに生涯を捧げていく決意を固めたのである。光世は光世一人ではなかった。前川と共にあったのである。

三浦夫妻にとって、前川正は二人の結婚生活の原点であった。二人は結婚式に前川正の母親を招待している。「綾さん、綾さんの結婚を、一番喜んでるのは、正さんかもしれないわよ」そう言ってくれる出席者もいた。三浦夫妻にとって、結婚式は前川正のおかげで自分たちが結ばれたことを確認する場でもあった。『道ありき』はこの結婚式の記述で幕を閉じている。

『道ありき』は、「絶望（敗戦のショック）→再生（前川正との再会）→絶望（前川正の死）→再生（三浦光世との出会い）」という繰り返しの中で、綾子が自らの幸福を自分の手で掴み取っていく物語である。絶望の深さが逆に再生の尊さを痛感させてくれるのだ。「転ぶことが恥ずかしいのではない。起き上がれないことが恥ずかしいのだ」生前、彼女はこう語っていた。この言葉が彼女の実体験から生まれたものであることは『道ありき』の読者には容易に領かれる。

『人間失格』の大庭葉蔵は、人間そのものを恐怖しているのは自分だけだと思ひ込み、世間を渡っていく手段として幼年期から道化を演じていた。確かに葉蔵は彼なりに必死だったはずである。しかし、彼は自分の近くにいる他人も自分と同様、悩みを抱えた人間であるということに気づけなかった。それは彼が生来、他者と本音で関わるということをしなかったからである。彼は自分が抱いた悩みを自己絶対化しており、そこには彼なりの矜持も内包されていた。彼が自分の心の内を誰かに語っていたら、おそらく事態は大きく変わっていたはずである。

『道ありき』の読者の大半もたぶん日常の生活では自己の不遇を嘆き、他人の幸福を羨んでいる。ところが、彼らがこの作品を読んで気づかされるのは、綾子の生涯に比べれば自分の悩みはたいいの場合とるに足りないものだということ。しかも彼女は、自分の生き方を誇らしげに語っているのではない。むしろかつての自分を反省し、自分の醜さ、愚かさと真正面から向き合っている。自分一人では決して立ち直れなかったであろう状況の中で、自分を導いてくれた人々への感謝の念を忘れない。しかし、その彼女もそのような人々に必ずしも最初から心を開いていたわけではなかった。徹底的な反発や反抗心を剥きだ

しにしたこともある。

土居健郎の『「甘え」の構造』が明らかにしているように、反抗することも「甘え」の一種である。反抗するにもその対象となる相手が必要であり、そこには無意識のうちに相手への求愛の意味合いが込められている。初めから期待しないのであれば、あえて反抗する必要などない。綾子の場合、その相手が前川正であり西村久蔵であつた。ただ、彼らは彼女を決して放棄することをしていない。反発を抱いているとき、本人は意外とそれが何に由来するものなのか分かっていないことが多いものである。実は反発そのものが理屈ではなく、極めて感情的なものなのだ。その実体が何であるかを発見していくプロセス、それがすなわち他者理解ということなのではないか。

『道ありき』を読んでいると、前川正や西村久蔵、三浦光世というすばらしい人間が次から次へと綾子の前に現れてくる。しかし、これを度重なる偶然と解釈するのは、この作品を表面的に理解したことにはしかならない。それは綾子という人間を見失うことに繋がる。最初は反発からスタートしながらも相手の中の真実を見出していったのは綾子そのものに他ならないからである。心の目を開いて自分の周囲を見回すことの大切さをこの作品は訴えている。